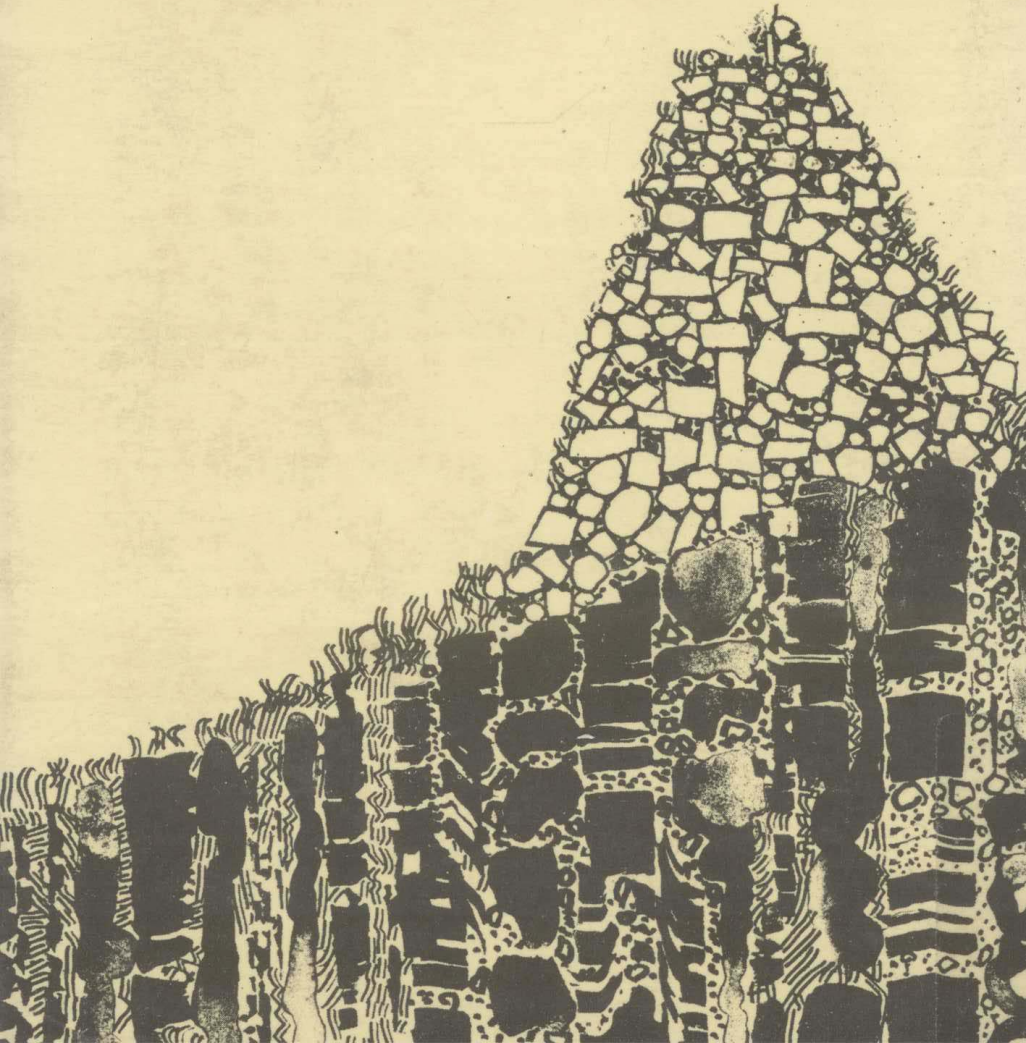
暖流

岸田国士



暖流

定価 八五〇円

一九七六年 七月一〇日第一刷発行
一九七七年 二月二八日第六刷発行

著者 岸田国士

発行者 竹内肇

発行所 株式会社三笠書房

東京都新宿区戸山町三五

電話東京二〇三局七七八一番代表

振替東京三—二二〇九六

郵便番号一六二

落丁・乱丁は本社またはお求めの書店でお取替えします。誠宏印刷・若林製本
©Eriko Kishida Printed in Japan, 1976
0093—001107—8001

暖流

岸田国士

三笠書房

〈目次〉

志摩家の人々……7
未知の世界……25
青葉若葉……52
宣　告……72
歌わぬ歌……90
秋まで……114
雲……136
前　夜……158
異性の友情……179
一　念……199
女同士……219
風雪の中に……236
冬の薔薇……264
窓々に灯は点れり……288

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

暖流

志摩家の人々

一

覗き込んでいる顔のすべてが、一斉にほっとした表情になった。

華奢な親指のさきから、今、抜き取ったばかりのミシン針をピンセットでつまんだまま、若い医者は、手術着の袖口で額の汗を拭いた。そして、やや上目使いに、

「痛かったですか？」

傷口から眼をそらして、静かに首を振ったのは、格子縞のスーツがぴったり似合い、心もちからだを捻って、椅子の背へ片肱をかけた姿態が、申分なくあでやかな二十そこそこの娘であった。

面長の、どちらかと云えばおとなしい顔だが、翳のない眼の張りと、口元の締り加減に、一種気位の高さというようなものを感じさせ、やや浅黒い皮膚が生毛のなかで温かな艶を含んでいた。

「なかなか強いですね」

と、医者は、照れた風でもう一度針を検めた。

ほかに、見物とも見学ともつかず、同じ手術着を着た医者が三四人も立会っていた。院長のお嬢さんが来たというので、もう病院じゅうは評判であった。ところで、外科部長が生憎大きな手術にかかっていて、代りに誰かがこの令嬢の指からミシン針を抜き取らなければならぬときまった時、「おれ

がやる」と、その役を買って出たのが笹島であった。彼はもちろん、あらゆる点で自信家の定評があるのである。

針が途中から折れているために、意外に面倒な手術であった。ピンセットがなんべんも滑って、そのたびに、彼は舌を鳴らし、いくぶん慌て気味であった。

が、もう、これでいいのである。

傷口にマーキュロが塗られ、繃帯が捲かれた。

「あんまり手を動かしちゃいけませんよ。ああ、なんだったら、三角巾で吊っときましょうか」

そう云いながら、彼は、さも易々と仕事を終ったもののように、口笛を吹きながら、手洗いの方へ大股に歩いて行った。

「しばらく休んでらっしゃい」

と、一人の医者が、お愛想を云った。これは中年の鼻の頭に膏をためたレントゲン科の主任であった。

すると、もう一人の方が勿体らしく、

「お父さんのお加減はどうですか？　あなたは、やはり別荘の方にいらっしゃるんでしょう？」

それがひどく癇に障る調子なので、志摩啓子は、呆れて、その顔を見なおした。

「どっちって、別にきまってませんの。その針、いただいてっていいかしら……」

と紛らすように起ち上って、彼女は右手をのばし、血のついたガーゼの中から、ミシン針を拾いあげようとした。

その時、一人の看護婦が、手早くそいつを乾いたガーゼに包んで、彼女の手に渡し、目立ないほどの会釈といっしょに、

「志摩さん、お久しぶりね……あたし、石渡ぎん、お忘れになった？」

服装が変っていたので、これがと、しばらくは信じられなかったが、云われてみれば、なるほど、それに違いなかった。小学から女学校の二年まで同じクラスだった、あの石渡ぎんなのだ！

二

「まあ」

と云ったきり、啓子は、眼を見はった。が、それきり、石渡ぎんの姿は、右往左往するほかの看護婦たちの白衣のなかへ消えてしまった。

「では、また明日、傷の経過を拝見しましょう。少しいじり過ぎましたから……」

笹島医学士の声でわれに返ると、啓子は思いだしたように、

「どうもありがとうございました」

と腰をかがめ、帰る支度をした。

「お大事に……。じゃ、お送りしません」

「院長によろしく……」

などという一人々々の挨拶をうしろに、手術室の外へ出ると、彼女は急に、頭がふらふらッとして、廊下の壁に手を支えた。さっきの、あの、眼の眩むような痛さをただ思い出しただけである。随分、我慢はよかったつもりだ。あれでいくらか顔をしかめただろうか？　もう誰も見ていないと思うから、彼女は、繃帯をした指を頬でやわらかくこすり、

「可哀そうに、可哀そうに」

と、心の中で云った。可笑しなことに、眼頭（めがしら）に涙がにじんで来た。

この時、不意に、後ろで足音がした。振返ると、石渡ぎんが泳ぐような手つきで走って来る。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「ごめんなさい。あたし、まごまごしちゃって……。でも、ここの養成所へはいる時から、この病院の院長さんが、あなたのお父様だってことは知ってましたのよ。いつになったら、あなたにわかるかしらと思ってたの。今日だって、あたしが黙っていれば、あなたご存じなかったわね」
「あたし、この病院へはめったに来ないから……」
「それに、看護婦の名前なんぞ、お聞きになることはないから……」
そうでもないわ、と、云おうとして、彼女は黙って歩き出した。
長い廊下の、窓からは、うららかな午後の陽が射し込んでいた。
昨夜の嵐がそこ此処に吹き溜めたらしい桜の花びらを、また舞いあがらせる風もなく、病棟を隔てる中庭の芝生には、雀が二三羽餌をあさっている。産科の病室から、赤ん坊の泣声が聞えて来ても、今日はなんとなく明るく澄んでいた。
石渡ぎんは、小柄な、しまった肉付の、北国の血をひいた、肌のあくまでも白い、顔だちは整っているというよりも、寧ろ一つ二つの欠点が魅力になっているという類の娘であった。
「あなた、ずっと外科の方？」
「ええ、今はそういうことになってますの。だから、あなたにお目にかかれたんだと思うと、うれしいわ、あたし」
つい、昔のような口のきき方になる。それをどっちも気にとめず、玄関へ差しかかると、そこには、事務長の糸田が慇懃に頭をさげていた。
「如何でいらっしゃいます？　危うございましたな。いや、あのミシンというやつは、そばで見ていても冷やひやいたしますよ。あ、お車をお呼びいたしましょうか？」
「いいんですよ」
啓子は、顔を直すと、さっさと靴を穿いた。

三

石渡ぎんは先廻りをして門のところで待っていた。
「電車通りまでお送りするわ」
啓子は円タクを拾おうと思っているのだが、折角だからそのへんまで歩くことにした。
「学校おやめになってから、どうしてらっしゃるだろうと思って……お遊びにいらっしゃいよ時々……」
「そんなことしたら、婦長さんにお目玉だわ。さっき手術室で、あなたに、ほら、お話をしかけたでしょう。ああいうことがいけないの。すぐに生意気って云われるんだから……。でも、近頃、随分平気になったわ」
そう云って、彼女は、片一方の眉をぐいとあげて笑った。傲慢でも卑屈でもなく、なにか、自分を知っているというような、聰明な笑いであった。
「お別れして何年になるかしら?」
と、啓子は、はじめて、しんみりとした。
「あたしが学校やめるとき、あなたにいただいた栞、まだ持っててよ」
ぎんは、また昔を思いだすように云った。
「あら、そんなものあげた? どんなんだか忘れちゃった」
「象牙に彫もののしてある、あたしたちには買えないような栞よ。いい色になってるわ」
そんなことを話し合いながら、二人は坂を下って行った。
病院は小石川の高台にあった。人通りは殆どなかった。石渡ぎんは、そこで、やや躊躇(ためら)うように言葉

をついだ。
「ねえ、志摩さん……。あたし、やっぱりそう呼ぶわ。お嬢さまなんておかしいから……。ねえ、志摩さん、今日あなたのお顔みたら、もう黙っていられなくなったの。こんなこと、あなたのお耳に入れる筋合じゃないかもしれないけど、あの病院のことで、近頃、いろんな噂がたってるのよ。まあ噂だけならいいけれど、あたしたちの眼にあまるようなことが、やけにあるんですもの。……院長先生はお見えにならないし、これでいいのかしらと思うと、あたし、仕事も手につかないくらいよ。それや、自分だけの事なら、病院を出ちまえばいいんだわ。でも、自分がこれまで勤めて来たところって云えば、そう簡単にはいかないし……。あなたならきっとわかって下さると思うの。それに、こんなことを、なんかの序に院長先生に知っていただけたら、またどうかなるんじゃないかと思ったりして……」
啓子は黙って耳を傾けていたが、この時、ふと、今日病院で感じた、どことなく不愉快な印象を、ぎんの話に結びつけて考えていた。
「というと、例えばどういうことなの？」
対手が話に乗ってくれたので、もう占めたという風に、
「じゃ、詳しく聴いて下さる？　でも、ちゃんと筋道を立ててお話することなんかできないわ。そういう種類のことじゃないから……。まあ、云ってみれば、病院のためにならないような事実を、片っぱしから数えあげるだけよ、よくって？」

四

啓子はうなずいてみせた。石渡ぎんの口から、さあ、どんな不平が飛び出すかと思うと、ひどく好

奇心さえ湧いて来て、促すように歩をゆるめた。
「改まって人の悪口を云うのはむずかしいな」
と、しばらく考えるように首を傾げていたが、やがて、
「あたしが……看護婦のあたしが云うんだと思わないで、聴いてほしいわ」
「だって、それや無理よ。じゃ、誰が云うと思って聴くの？」
「あなたの古いお友達……」
ぎんは、わざと澄まして、胸を張った。
もう電車道はすぐそこである。話はいつまで続くかわからない。啓子は、別にこれからどうしようという当てがあるわけではないが、こんなところで立話もできまいと思うと、少し困った。
「あら、もう来ちゃったわ、遅れると大変々々……。じゃそのお話は、またこのつぎね。明日は繃帯交換にいらっしゃるわね」
そう云ったと思うと、ぎんは、片手を差し出して軽く振り、裾をひるがえしながら、走り去った。
この旧友は、かつての学生時代の、あのむっつりしたところがまるでなくなっている。人なかで揉まれ抜いたというところが見える。それにしても、彼女は病院のことで何をこの自分に云いたかったのか、それをすっかり聴かずにしまったのはなんとしても惜しかった。普段はまるで自分の生活とは縁のないもののように思っていた病院のことが、こうなると妙に気になりだした。
父が、もう一年近く病気で鎌倉山の別荘に引っ込んだきりでいること、本郷の家には兄夫婦がいるのだが、この兄は医者とは名ばかりで、めったに病院へは顔も出さず、競馬やゴルフに凝っていること、それらを思い合わせると、日頃の無頓着な啓子の眼にも、志摩病院の将来という問題が大きく映って来た。
彼女は空車を呼びとめて新橋駅へ走らせた。両親の顔が急に見たくなったのである。まだ女学校の

専攻科へ通っている関係で、土曜の晩以外は本宅の方へ寝泊りをしているのだけれど、どうかすると、今日みたいに、ふっと別荘の方へ足が向くのである。

藤沢までの列車が、いつもよりのろく感じられた。

母の顔がもう眼にうかぶ。この指の繃帯をみたらなんと云うだろう？

女学校の同級のうちで、一番早くお嫁に行った友達が、もう赤ん坊を産んだ。お祝いに手製のベビー服をやろうと思って……こんな風に話して行くうちに、母の表情がどう変って行くかこれはちょっと楽しみだ。

五

別荘は藤沢からバスでいくらもない鎌倉山の、新しく松林を切り開いた眺めのよい丘の上に建っていた。純日本風の母屋と、離れの洋館とが渡り廊下で繋がり、啓子の父志摩泰英は、おおかた離れの方にいっきりで、まだ寝つくほどではないが、近頃は散歩の度数もだんだん減らしている。

実をいうと、彼は、自分でもう、胃癌の徴候を発見し、それを誰にも云わないでいるだけであった。時々、病院の医者たちが見舞いに来るには来るが、別に脈を取るでもなく、「僕のからだは、僕が一番よく知っとる」と云われ、苦笑しながら引き退るような始末である。

彼は、こうして、刻々死の近づくのを待っていた。

啓子は、母の顔をみると、いきなり、

「お客さま？」

と、訊ねた。玄関に靴が揃えてあったからである。

「どうしたの、その手は？」

母の瀧子は、逆にきめつけた。
「これ？　怪我よ」
「怪我はわかってるわ。なにいたずらしたの？」
「あら、ミシンを使うのがいたずらなの。へえ、はじめて知ったわ」
啓子は、まず相手をじらすのである。
「ミシンで指を縫うひとがありますか。みせてごらんなさい」
「見たってわかりゃしないわ。もう、針は抜いちゃったのよ」
母がきょとんとしているので、
「針が親指へ突き刺さったのよ」
「そんなら、あんた、大変じゃないの」
「そうよ、大変よ。だから、病院で大手術を受けて来たわ」
「当り前に話をしたらどう。そんなに大袈裟に云わないで……」
「大袈裟になんか云ってやしないわ。とにかく、綾部さんの赤ちゃんに着せてあげようと思って、素敵な型のベビー服を考案したのよ。だって、出来合はろくなもんないんですもの、それを今日学校から帰って縫いはじめたの。ミシンの工合がどうも変なのよ。いよいよ襟をつける時だったわ。ぐいと電流を入れた途端に、指がすべったのね、それこそ、からだじゅうがじいんとして、何事が起ったかと思ったわ。左手の親指がもうしびれて動かなくなってるの。でもアッとかなんとか声を出したんでしょう。君やが駈けつけて来て指を外してくれたの。ところが、刺さった針が途中から折れて、尖端の方が裏っ側へ出てるんだけど、引っぱってもなかなか抜けないの」
母は、そこで思いきり顔をしかめ、肩をすぼめて身顫いをした。
啓子は、すべてが思った通りなので、さも満足したというように、ひと息ついた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com